



PIONEER OF SOUTHEAST ASIAN ART



東南アジア、アートの開拓者

東南アジアのアートを知っているか？ 停滞を続ける欧米各国を尻目に、メキメキと発展を続ける東南アジア。その経済成長に伴って、アートシーンの花も開きつつある。なかでも重要な都市であるクアラルンプール、そしてシンガポールにギャラリーを構え、これからは担う若きアーティストを束ねる男がいる。その名も RICHARD KOH。彼の眼に映る、新たなアートのフロンティアを覗いてみよう。

PHOTOGRAPHY BY KENTA SAWADA. Edit. KOUEOKA (Rights).



THE ART OF RICHARD KOH



今、世界のアートはどこを中心に回っているのだろう。かの有名なオークションハウス「サザビーズ」や「クリスティーズ」の本家を抱えるロンドンか？ 世界最大級のアートフェアの行われるパーゼルか？ それとも、星の数ほどのギャラリーがひしめくNYか？ いずれにせよ欧米諸国のギャラリストやコレクターを中心に、このアートワールドが回っていたことは間違いない。そう、これまでは。

しかし、これからはもう「ASIA」の4文字からは目を背けることはできない。目まぐるしい経済成長とともに、アート界でもその存在感を発揮し始めたアジア諸国。欧米の覇権を奪うとはいかないまでも、上海、香港、シンガポールといった都市を中心としたマーケットの重要性はもはや明白だ。そのなかで「デイヴィッドツヴィルナー」や「ガゴシアン」といった西洋を股に掛けるメガギャラリーの手回しは早く、アート界の新たなフィールドを牛耳るためか、すかさず香港にギャラリーを開業。シーンが欧米色に染まってしまうのももう時間の問題だ。では、まだ未開の「次なるシーン」は一体どこにあるのか？ 気の早い人は、すでに目をつけているかもしれない。新たなアートシーンの炎は東南アジアに燃えているのだ。

まだ見ぬアートシーンを求めてたどり着いたのはマレーシアの首都、クアラルンプール。経済成長を象徴するかのよう摩天楼が束になってそびえ立つ、東南アジア屈指の国際都市だ。その中心から少し西へ行った、閑静で自然あふれるエリアに、東南アジア最重要といえるギャラリーが拠点を構えている。Richard Koh Fine Art (以下 RKFA)。2005年に創立し、まだ14年ほどの運営期間であるにも関わらず、クアラルンプールの他にシンガポールにもギャラリーを構え、現在はバンコクにも臨時スペースを保持している。メガギャラリーと呼ぶほどではないが、東南アジアにおける重要都市はしっかりと抑えているといえよう。そのオーナー Richard Kohこそ、東南アジアのアートシーンの現在、そして未来の鍵を握る人物だ。

アートを使った金儲けがうまいこと。これはギャラリストにとって欠けてはいけぬ素質である。多くのギャラリストにとって、アートはもはや夢や理想じゃない。アートはビジネスだ。そして、アーティストも数多ある職業の一つであることを忘れてはいけない。生き延びるために、作品を売らなくてはならないのだ。ただ、近年のアートはあまりにも商業的になりすぎてしまった。メガギャラリーは、ついにオンラインショップの運営に着手。実物を見ることなくアートが売買される時代に突

入ってしまった。アートはマネーゲームの駒に成り下がりにつつある。そんな時代にも、アートの未来を見据え、アートの力を信じているギャラリストが Richard だ。

「東南アジアはまだアートマーケットとして成熟しているとは言えません。売上だけを見れば、香港や上海にまったく及ばないことでしょう。しかし、ここには希望に満ちたアートの燈(あかり)があるのです。なぜなら、エネルギーに満ちた若く人々が多く存在し、起業家精神溢れる人々が集う経済成長地域ですから。誰もが何かをしたいと思って、ウズウズしているようなところなんです。このエネルギーは、今のアート界に蔓延した商業主義や金儲けの道具としてアートを扱う潮流をとりはらい、アート、そして社会全体が有機的に成長する手助けとなるでしょう。そして、私のギャラリーはそのようなアートシーンと成長をともにしていきたい」

ファッションデザイナー、
インテリアコーディネーター、
そしてギャラリストへ

Richard Koh は数奇な人生を歩んできた。有名大学を出たエリートでもなければ、美術学校に通った天才でもない。彼がごく一般的な高校を出て就いた最初の職業は、なんとファッションデザイナーだった。

「偶然のことだったんですよ。とりわけファッションに興味があったわけではないんですから。80年代、普通の学校に通う16歳の少年だった私には、絵を描く趣味があった。それを眺めていた友人が「服をデザインしたらどうか」と急に言ってきたんです。ひょんなことからクアラルンプールで開催されていたファッションコンペティションにデザインを提出することになり、なんとファイナルまで選ばれた。すると企業からオファーが舞い込んで、晴れてファッションデザイナーとなったんです(笑)」

なりたくなかったわけではない。だがその才能はピカイチだった。彼は自身が統括するウイメンズウェアのブランドを持つまでに成長し、クアラルンプールの「伊勢丹」(そう、クアラルンプールには「伊勢丹」がある!)に、ブティックを構えたほどだ。80年代後半には、本場の空気を肌で感じるためにファッションの中心地であったロンドンに移住。ちょうど多くのアジア人がパリやロンドンに足を踏み入れはじめた時期で、多様な価値観が入り混じり、街全体が活気づき始めていた。Richard はコンミチコ率いる《ミチコロンドン》のアトリエで働いていたという。異文化に触れた刺激的な時間はあっという間に過ぎた。ロンドンからクアラ

THE ART OF RICHARD KOH

ンプールに戻った彼が次に目指したのはNY。しかしその準備期間の半ばで、ジョブチェンジを果たすこととなる。ファッションデザイナーだった Richard は、インテリアコーディネーターにその姿を変えたのだ。

「東南アジアは、誰もが何かをしたいと思って、ウズウズしているようなところなんです」

— RICHARD KOH

「クアラルンプールにはNY 渡航前の休暇として戻って来たようなものでした。私の人生を変えてしまったのは、ある小さな部屋を見つけたこと。その居心地の良さをとても気に入ってしまい、NY 渡航前なのに購入してしまった(笑)。私はNY 行きを取りやめ、部屋をデコレーションし、暇を見つけては客人を招くようになりました。すると私のブランドのファンだった一人の女性が「私の家全体のインテリアコーディネートもやってみない?」とオファーをくれたんです。そうして私の職業は、ファッションデザイナーからインテリアコーディネーターになったというわけです」

なんとこの破天荒な決断。しかし彼の有り余る才能が、その決断をポジティブなものへと変換してきた。いや、才能以上に人柄なのかもしれない。彼は真摯に他人の言葉に耳を傾ける。好奇心に身をまかせ、あらゆることにチャレンジする。そうして、いつしか点と点がつながり、また一つの運命を手繰り寄せる。

「インテリアコーディネートに使えそうなあらゆるものを買って、アートはそのうちの一つ。インテリアとして映えそうな作品を探して、地元のアーティストのアトリエを訪ね歩いていました。ときには日本のアーティストの作品を買うこともあって。草間彌生や山田正亮の作品でした。今では高額すぎてとても買えないけれど、当時は誰も見向きもしなかったのです。彼女らの美学は現実世界にもフィットし、リアルな生活の場である部屋の壁にもかけやすい絵でした。アートには、家に飾ると空間全体を占有してしまうほど強いパワーがある。一度強いアートをコーディネートしてあげると、その後家主はアートに熱中するようになって、自分でコレクトをし始めるのです。そして私がそれをまた手助けするという面白い循環が生まれました。そうしてアートのバイイングを続けるうちに、次第に顧客やアーティストから「君はとてもセンスがいいからギャラリーを開いたほうがいいんじゃない?」とそそのかされるようになったのです(笑)」



02

01

01
Join Us On the Other Side
2018
Acrylic and structuring paste on linen
[above] 153×183cm [below] 76×121.5cm

02
Window 3
2017
Oil on linen
160×180cm

RICHARD KOH FINE ART | represented ARTISTS | 01 |

YEOH CHOO KUAN

[b. 1988, Malaysia] lives and works in Kuala Lumpur, Malaysia.



バイオレンスをテーマとした制作を行うペインター。暴力から生まれる傷に着目し、スクラッチ技法を多用。キャンバスに多数の傷跡を生じさせる。作品は、「キルビル」などバイオレンスを映画や、ネットに流れるような日常に潜むバイオレンスから着想されている。中国の山脈を描いたかのようなモノクロの新作は、領土問題で流れた血が染み込んだ大地を想像したという。その一方で、上方からドリッピングされるインクが傷にあたる様は、「ケア」のような暖かい優しさを見出すことができる。巨大なアートワークのため、アトリエもとても大きい。



クアラルンプールのギャラリー2F部分。取材日にはYeoh Choo Kuanの個展が開催されていた。1Fは家具が置かれたアットホームな空間で、所属作家の作品が常設されている。

THE ART OF RICHARD KOH

ることに寛容なんです。挑戦的でクレイジーなものも多いけれど、それが変化の源になっているのです」

なるほど、西洋との違いは分かった。では、同じアジアである日本や韓国のアートとの違いはどこにある？

「韓国や日本のアートは静かで控えめな傾向があって、『LESS IS MORE』な美学がありますよね。東南アジアは『MORS IS MORE』です(笑)。色彩もよりカラフルでビビッド、ごちゃごちゃと多様な要素が作品に散りばめられダイナミック。この違いには、太陽が関係しているはず。常夏の南国というお国柄だし、日常的なものすべてが色鮮やか。フルーツも色に溢れているし。日本や韓国、台湾の太陽光は、東南アジアほどに眩しくも黄色くもない。すると当然、色や光に対するアプローチが異なってくる。また、季節の有無も関係があります。アジアの多くの国には四季があって、冬にはネイビーや茶色、グレーなど落ち着いた色の服を着ることが多いでしょう。季節がなく常夏の東南アジアではみんな派手な色を着ている。同じアジアでも、そもそもの美的感覚が異なるんです。これは工芸にも当てはまりますね。日本や韓国では、ものすごくシンプルで小さいサイズの工芸品が多いのに対し、私たちの手芸といえば、細かいというよりは荒々しい。それぞれ異なった美しさがあります」

そうして2005年、ついに自身の名を冠したギャラリーをオープンさせた。Richardが選んだ物件はいわゆるホワイトキューブではなく、家のようなアットホームな空間。当時の東南アジアには、現在ほどコンテンポラリーアートを収集する習慣は浸透しておらず、私的で落ち着いた空間が好ましかった。そう、当時のクアラルンプールのアートシーンはとても小規模。東南アジアのアートムーブメントはインドネシアのジャカルタにあり、それもちょうど盛り上がりを見せ始めた時期だった。もちろんRichardにとっても逆風下。ギャラリーだけで食っていくことはできず、インテリアの仕事も続けながらの運営だった。その辛抱は長年報われることなく、クアラルンプールの市場規模は横ばいの一途。取り付く島もなかった。2010年代に突入すると、ジャカルタにあったアートの熱はシンガポールに移動。国際的なアートフェア「アートステージ」も新設され、まさにシンガポールのアートシーンが急激に発展した時期だった。ここで、Richardの行動力が活きる。

2015年、ほんの少しの成功と大きな経験を手に、再びクアラルンプールに戻ってきたRichardの目には何かが変わって見えた。若いエネルギーに溢れ、輝かしい未来を感じさせる。クアラルンプールが宿していたのは、そんな空気だった。ついに、追い風が吹いてきたのだ。

東南アジアのアートとは？

Richardは西洋のアートを売らない。アジアの、特に東南アジアのアートにこだわっている。東南アジアのアートは、馴染みのある西洋のアートと何が異なるのか？

「国ごとの差別化はまだまだだけれど、東南アジアのアートは作品を見るだけで“東南アジアのアート”だと分かる。自分たちがもつ固有の感覚や文化を、しっかりと作品に込められている証拠です。西洋のアートはそうとは限らない。アメリカやカナダ、ヨーロッパの人々は同じ類の教育を受けていて、感覚やアートの文化に相違がありません。特にグローバル化によって均質化が進んだ現代ではね。NY、ロンドン、パリ、イタリア、スペイン……。どこを訪れてもレストランでパスタやピザを頼み、マクドナルド、スターバックス、なんでも一緒。しかしアジアは国ごとに何かもが違ってくる。食べ物が違えば味も違い、文化や言葉のバリエーションも圧倒的に多い。批判をしたいわけじゃないのですが(笑)、アートに限らず、西洋には昔からのルールやマナーに固執する傾向があって、変化が許されないからこそもつまらないと感じることもある。反対にアジアにはもっとリラックスした雰囲気があり、テクノロジーや発展に対してみんな興味津々で、トライす

まだ確立できていないという東南アジアの各国それぞれの“らしさ”。それは、これからの時代を担う若いアーティストが見つけていくのだろう。ならばまだ発展途上なアーティストに会うことで、“らしさ”の断片が垣間見られるかもしれない。そうして、クアラルンプールを拠点とする地元アーティストの下を訪ねてみた。RKFAに所属するペインター、Yeoh Choo Kuan。彼もクアラルンプールでもがき続け、自身のアイデンティティを確立したアーティストの一人だ。これまで内省的な手法を取り入れた抽象画を発表してきたKuanが現在取り組んでいるのは、まるで中国の山脈を描いたかのようなモノクロ作品だ。実は多民族国家であるマレーシア。先住民を含むマレー系、中国系、インド系の3つの人種が、互いに混ざり合うことなく無関係無干渉を貫きながら共存する国なのだ。それは多層的とも言えるが、強固なアイデンティティに欠けているとも捉えられる。Kuanは中国系マレーシア人。そのアイデンティティ問題に葛藤しながら、アートと、そして自分自身と向き合い続けてきた。

「多民族国家であるマレーシアに中国系マレーシア人として生まれ、自身のアイデンティティについて悩

THE ART OF RICHARD KOH

む時期もあった。中国系マレーシア人が中国の風景画を描くと、人々の困惑を招く。「君は中国人ではなく、陰陽も学んでいないのに、なぜ中国風の絵を描くのか」と。しかし原体験である幼い時分を思い返すと、僕のアート心を刺激したのは中国の絵だった。でもそれは仏教における地獄を描いたものだった。同じく陰陽の概念を含み、中国的美学を内包しているが、それらとはまったく異なるコンテンツだ。それに気づいたとき、自分のアイデンティティが少し分かった気がした。中国系マレーシア人として、どのように中国のアートフォームと関連していくか。似ているようだけれど、まったく違う。これは僕自身のルーツを辿る、自己発見なんだ。今は民族間のカルチャーの融和におけるポジティブな側面を捉えようとしている。このスペシャリティを押し広げて考えるんだ。もがき続けることで自分のアイデンティティをより強くすることができるはずだ」

遠親した語り口調のKuanに年齢を尋ねると、まだ30歳だと言う。若い。しかし、いつかはマレーシアのアートシーンを背負って立つ男と思わせるほど、すでにその言葉と作品にはパワーが漲っている。調べてみると、RKFAに所属するアーティストはほとんど若年であることがわかった。Richard曰く、東南アジアの若いアーティストにおける技術や作品の質は向上し、西洋の同年代アーティストたちと比較してもすでに遜色ないレベルに達しているという。なぜ若いアーティストが育っているのか。その理由こそ、この男がアートの未来の鍵を握っていると言える所以である。

「私はアートのメインストリームや流行をあまり気にしていません。私の使命は、若いアーティストを宣伝し、支援することにあると信じています。シンガポールのギャラリーではインドネシアやフィリピン、タイの名の知られていない若いアーティストをギャラリーに招致し、国外での初個展の場所を提供してきています。クアラルンプールでは主に国内のアーティストを扱っています。最近では、学校を卒業したばかりの25歳のアーティスト2人に、プラットフォームを提供しましたね。若いアーティストにどんどん発表の機会を与えたいんです」

アジアを旅するアートスペース。

語るだけでは理想は叶わない。2018年、Richardは画期的なニュープロジェクトを始動させた。その名も「Richard Koh Project」。ある場所にスペースを借り、そこを短期間限定的なギャラリーとして運営する

という。いわば、移動し続けるギャラリーだ。しかしマレーシア国内を動き回るのはなく、国境をまたいだアジアの異国の地で行っている。同じアジアといえども、国ごとに言語も違えば社会システムも異なり、アート界のコミュニティ関係や運営にあたる現地のスタッフ



「ものづくりの喜びを知ること、のちにより広い視点で物事を考えられることにつながりますから」

— RICHARD KOH

が、ギャラリーの単独の試みとしてはかなり大胆と言える。いや大胆を通り越して、はっきり言ってクレイジーだ。現在はプロジェクトの皮切りとして、タイのバンコクにスペースを借りてギャラリーを開いているが、1~2年後には次の国へと移るといふ。

「実はこのプロジェクトは、昔から『コム デ ギャルソン』が行なっている、ゲリラ的にポップアップストアをオープンする手法を参考にしています。ファッションデザイナーをしていた経験が生きていますね(笑)。プロジェクトの主な目的は、インドや中国、ベトナム、カンボジアなどを拠点とする、まだ個展の経験がなく作品を披露する機会もない、とびっきり若いアーティストにスペースを提供することなんです。このプロジェ



クトを始めた背景には、アート界が抱える2つの問題点があります。一つはアートが商業的になりすぎていること、もう一つはミュージアムが力を持ちすぎていることです。ミュージアムが展示の場として適さず、商業的でもないが、とても素晴らしいアーティストも存在します。しかしアート業界で肥大化した問題点のせいで、若いアーティストには発表を行える場がなく、誰も目を向けることができなくなってしまっている。この問題を解決するのが、私たちがこのプロジェクトを遂行する理由です」

なるほど。あたかも飄々と語るRichardだが、実現のためにあらゆる困難を乗り越えてきたに違いない。そもそもプロジェクトの運営にも相当費用が嵩みそうだ。そのペイができ、さらには利益を生み出すほどに、無名アーティストの作品が売れるものなのだろうか。その答えは……ノーだった。

「正直、まったく売れてない(笑)。収益にならない以上、小さな空間を借りてランニングコストがかさみ過ぎないようにするのも継続のポイントとなっていますね。若いアーティストが発表の機会を得ることができ、その認知度を上げることができるということが重要なのです。小さな規模での個展にはなりますが、展示方法に制限は設けません。のびのびとやってほしい。たとえ人々が会場を訪れて直接作品を見ることができなくても、ウェブサイトやプレスリリースをきっかけに知ってもらうことができます。実際、多くのアジア圏のプレスはとても親切だから、私たちのプロジェクトをフィーチャーしてくれます。だから、名が売れていないアーティストにスポットライトが当たる素晴らしい機会になるのですね」

なんと、採算度外視のプロジェクトだった。なんのバックアップも受けていない一人のギャラリストの決断として、クレイジーにもほどがある。発想がぶっ飛んでいて、とても刺激的だ。

「もちろん売れてほしい気持ちは山々ですが(笑)。かつて東京の小さなギャラリーで山田正亮の作品を買ったときのことを思い出しますね。ギャラリストは山田の作品はまったく売れないとぼやきつつ、私に購入の決め手を訊いてきたくらいでした。市場評価は顧みず、いい作品だと思ったので買ったのですが。しかし今となっては山田の作品はコレクターに大人気で、相当なプライスで取引されている。ロンドンでギャラリーを運営している友人が「Frieze」に出店したとき、ブースすべてが山田の作品で埋め尽くされていました。その値段を見て「私が買っていたときはもっと安かった」と言って買値を教えたら目を丸くして驚いていました



01
Pacific Vortex IX
2018
oil, lacquer, construction net
and Polyurethane foam on canvas
75cm (diameter)



02
Clinquant
2018
oil, lacquer, construction net
and Polyurethane foam on canvas
122 x 102cm

RICHARD KOH FINE ART | represented ARTISTS | 02 |

FAIZAL YUNUS

[b. 1989, Malaysia] lives and works in Kuala Lumpur, Malaysia.

マレーシアの都市部から遠く離れた、小さな村出身のアーティスト。都市を彷彿とさせるインスタトリアルなマテリアルを使うが、インスピレーションは故郷の豊かな自然や風景に由来。相反する要素を合体させることで、独自の世界観を創出する。環境汚染をテーマにした作品シリーズ (01) では、プラスチックの過剰使用を批判的にとらえ、プラスチックゴミでできた島が海を汚染しているかのような作品となっている。現在もRKFAで働きつつ作家活動を行う彼は、クーラーもない細長い部屋で黙々と描き続ける姿が印象的だった。



01



02

01
Breakfast for Champions
2018

Terracota, ceramics, epoxy putty, epoxy adhesive, cement, sand, latex, Puttyfilla, oil paint, varnish
70×37×37cm

02
Steps and corridor II
2018

Oil and acrylic on canvas
50×40×3cm

RICHARD KOH FINE ART | represented ARTISTS | 03 |

HAFFENDI ANUAR

[b. 1985, Malaysia] an artist based in Kuala Lumpur, Malaysia.



ローカルな素材や道端から拾ってきた廃棄物を利用し、ペインティングからオブジェまで幅広く制作を行う。花瓶を破壊し、それをまた花のモチーフにつくりあげる。マレーシアの伝統的なマスクを現代の価値観や新しいテクノロジーをイメージしたカラーリングに変更するなど。新作ではジェスモナイトという水性樹脂マテリアルを使用している。これは背骨を模してつくっている。「たまたま好きなのだ」と語るカラーのチョイスは独特で、東南アジアらしさを感じさせる。自然以外にもクアラルンプールのビル街をモチーフにすることも多い。

THE ART OF RICHARD KOH

ね。「いくつ山田の作品を持って？ すべて買い取るよ」って返されたけど(笑)。つまり、今このプロジェクトで扱っているアーティストも、山田のようになる可能性が大いにあるってことなんです」

教育こそ、未来。

教育は未来をかたちづくる社会基盤である。Richardはそのことを重々承知しているようだ。クアラルンプールのギャラリー3Fにあるオフィスを覗くと、何名もの若者たちが働いていた。聞くと、みながアート学校に通うアーティストの卵だという。Richardはアーティストを自身のギャラリーに雇い入れているのだ。それもアーティストとしてではなく、一人の運営メンバーとして。

「ギャラリーのオフィスで働くことは、アーティストにとってメリットが多いのです。第一に若いアーティストにとっては、アーティストとしての仕事だけでこの時代を生き抜くのは難しい。自分のスタジオの家賃を払い、画材を揃え、基本的な生活費を稼ぐ別の仕事が必要不可欠です。さらにギャラリーで働くことは、仕事を通してギャラリーがどのように運営されているかを学ぶことができ、勉強の場にもなります。アーティストそれぞれの活動ペースに合わせてフルタイム、パートタイム、ときにはプロジェクト単位で仕事を任せ、全員で内容をシェアすることで、急に来られない人の穴埋めもできるようにしています。お金のみの支援があればいいわけでもありません。パトロ的な人物が生活費や活動費を無償で与え続けると、怠け者になってしまうケースもあります。だからRKFAでは、きっちり働いて金を稼ぐという、まっとうな方法を提供しています」

Richardのギャラリーに所属し、彼の元で働いていたアーティストたちを訪ねた。クアラルンプールを拠点とするアーティストHaffendi Anuarは、かつてRKFAで働き独立、現在はフルタイムのアーティストとして活動している。

「俺は3年間フルタイムで働いていたね。タフな時間だったけれど、ギャラリー運営のされ方をみっちり学び、そして運営にどれほどの時間がかかっているかを知ることができた。また、働く時間と自分の制作の時間のバランスの取り方の難しさについても思い知ったね。今はフルタイムで自身の制作に没頭でき、よりアイデアを形にすることが早くなったよ」

作家Faizal Yunusは、現在もRichardの元で働きつつ、アーティスト活動に勤しむ。勤務外の時間は



クアラルンプールのギャラリー3Fにあるヘッドオフィスで働く、アート学校に通う学生たち。ガラス壁面にマーカーでスケジュールや共有事項を書くことで、全体共有する。

自身のアトリエに籠り、制作を続けている。Richardのギャラリーで展示を行うこともあれば、一人のスタッフとして他アーティストの展示を手伝うこともある。ときには、展覧会図録に文章を寄せることも。

「僕はRichardのもとで働いて5年になり、ここでは素晴らしい経験ばかりしてきたよ。他のアーティストの制作プロセスを直に見ることはとても参考になるし、このような経験こそ若いアーティストにとって大事なことなんだ。またRichardは仕事を提供し生活を安定させてくれるだけでなく、自身のギャラリースペースにてエキシビションの機会も与えてくれる。僕の通っていたアートスクールの卒業生は、たった2%のみがアーティストとして生活し、残りの98%は異なるフィールドで働いている。僕はRichardの下にいるからこそ、アーティスト活動を続けることができている。とてもラッキーだね」

アーティストを食いつぶさないようにし、アトリエを訪ねては相談にのるメンターの役割を果たす。アートディーラーとして広報をし、作品を売る。何より彼はアーティストに対して、古くからの友人のように冗談を交えて気さくに接する。アーティストにとってこれほどありがたい存在はいないだろう。そうして、何人ものアーティストが道を踏み外すことなく育ち、マレーシアを代表する作家へと進化を遂げている。そんなアーティストともに、この国のアートシーンもこれから目まぐるしく成長を続けるであろう。その鍵を握るRichardは、どのような未来を見つめているのだろうか。掲げる理想、いや目標は、ギャラリストの役割をはかるに超えていた。

「東南アジアのアートは始まったばかりです。90年代は古いスタイルのアートシーンを踏襲しているようでしたが、今では収集家の母数が増え、若い人たちが

が多く参加するようになりました。また海外の人たちも目を止めるようになってきましたね。ここ十年はみんなが同じようなアートを買っていたと思います。コレクターなら村上隆や草間彌生の作品を持っていないとねというような感じ。アジア人にはそういったマニュアルが必要だったのです(笑)。しかし今は、みんなが視野を広げて周りを見渡し始めた時代になったので嬉しい限りです。僕個人としては、これから今やっていることを続けられるように頑張るのが一つ。さらに計画段階ではあるけれど、非営利な活動も考えています。アートに恵まれない人たちへの学びの手助けになるためのね。経済的に恵まれない人々への寄付は現存しているけれど、アートの価値観の教育には誰も力を入れていない。教育においてアートは重要ではないと思われているようですが、そんなことはありません。子どものときにものづくりをしない、大人になってどんなに魅力的なデザインや建築物を前にしても、ものづくりに対する感動がないから興味を持っていないのです。アートを楽しめない、アートに感動できないような人を生まない社会に向けて、手助けをしたい。それはただコンピューターを買ってあげるなどではなく、ものをつくる喜びを教えられる場をつくることで貢献したい。ものづくりの喜びを知ることには、のちにより広い視点で物事を考えられることにつながりますから。幸運なことに、あと数年でこのプロジェクトを始められそうです。ギャラリー自体が存続できていればの話ですが(笑)」

Richardはこれからも、太陽のように東南アジアを照らし続ける。彼がいる限り、アートシーンの未来は明るい。